

結びに

—農芸化学と産業を結ぶもの



明石 武和

味の素(株)専務取締役
日本農芸化学会副会長

日本農芸化学会の原稿用紙を前に、改めて考えた。一農芸化学って何だろうーそして農芸化学と産業を結ぶものは何かー1986年4月を迎えた朝、窓から入る京都の早春の空気と風情を楽しみながら……。

1984年9月19日、日本農芸化学会創立60周年記念式典で坂口謹一郎先生は「日本の農芸化学は、……ただいまのところ Nohgeikagaku としか名のつけようのない学問であります……」と言われた。また最近読んだ高橋健先生の田村三郎先生との対談の中には“農芸化学は細分化すれば実体がなくなる”と記されているとともに、実に昭和6年に“農芸化学とは何ぞや”という問い合わせ、後藤格次先生が、その著者の序のなかで述べられていることを知った……。ついでに、もう一つ考えてみよう、産業とは何かと。そういえば、こんな議論を銀行筋の人からふっかけられたことがある。——バイオテクノロジーは21世紀の日本の経済の救世主たりうるか?——一国の経済は産業活動ぬきには語れないし、そこに企業活動がある。そこで、ここでは産業という言葉を企業活動と置きかえて、産業と農芸化学を結ぶものは何かを考えてみよう……。

学問も産業も人間の営みである。そこで結ぶものの第一は“ヒト”であると言おう。大学の目的に“有為なる人材の涵養”があると聞くが、まさに教育・研究の場としての農芸化学と産業を構成する企業とは“ヒト”によって結ばれている。さらに、そこに生ずるものー人間の動き、人間関係がある。この意味で第一にヒトをあげる。そして、ここに掲載された諸先輩の“隨想”が端的に、これを物語っている。

次に結ぶものとしての技術を考えてみる。産業は政治および国際問題は別として、人口・資源・環境そして技術、これに情報ぬきには語れない。たとえばロボット、そして人工知能産業は、日本のこれらの動向からして、21世紀に向けて期待される大きな存在であるとい

う……。ではバイオ・インダストリーはどうであろうか。確かに18世紀末に英国で起こった産業革命以来、そして日本の戦前、戦後、そして高度成長期を一貫していえるのは大型化・多量化・高速化そして集中化が産業の歩みであった。バイオ・インダストリーもこの例外ではない。そして、このベースに農芸化学に支えられた技術がある。この点でも諸先輩の“隨想”は語りかけている。

一方、21世紀に向けてバイオ・インダストリーは各種の調査が示すようにバラ色の予測が描かれている。このなかには従来法ではできなかった新製品やまったく新しいプロセスも期待されよう。しかしこれだけで良いのか。今日地球上の資源と環境の有限性が認識されている。これは価値観の変革を迫る大きな意義を持つ。今後、資源としての食糧はもちろん、renewalなエネルギーに注目したい。この意味から、“農”の原点に立つ、しかし新しい農芸化学によるブレーク・スルーと、これを社会に結びつけるシステムに期待したい。

(そういえば、この農芸化学の大会で発表のある葉緑素のDNAの解明、これから聞きに行かなくちゃ……。)

まだまだ結ぶものはあろう。しかし、これらの思いをこめて“出会い、大事に!”と再び言おう。

最後に、これから世の中の変化、とくに変革ということをみてみよう。“諸行無常”——これは中学で習った言葉、“万物は流転す”——これは土壤学で習った言葉、いずれにせよ、世の中は変る。しかも、今、世の中は大きく変りつつある。たとえば重厚長大から軽薄短小という言葉が、また多様化・個性化・国際化・情報化という言葉が端的にこれを示す。このため企業活動は社会の変化に対応して変る。また自ら変革、いや革新してゆく、そのダイナミズムが新しい時代への潮流を創る。しかも、それは近時、急速に、激しく、しかも大きく、全地

球レベルで……。

では、この世の中の変化に対応して学問はどうであろうか。とくに技術のベースに在る学問のあり方を考えみよう。

確かに農芸化学は“なぜか”的追究とともに人間に、人類に、そして社会に何が大切か、“それがどう役に立つか”が一体となって成立した。これは今までとは異質の新しい学の成立であり、そこからアクティブな創造的活動が生まれた。しかし、今日の企業活動が創造的破壊ともいえる革新を伴って動くとき、アプライド・サイエンスのあり方が新たに問われよう。いや、ここにこそ革新が求められるように思える。

第二は人間の良心、生命への倫理観の問題である。人類の歴史のなかで神のみが司る行為とされてきた個体の生存とその継承として遺伝の問題を人類は解明しつつある。このことは人類が同時に大きな課題を背負ったことを意味する。一方、自然科学も技術もそれ自体美しい存在であり、そして、ロマンを求めての歩みである。これ

ゆえに、しばしば人間は自然科学優先、技術優先に陥りやすい。このためには、自然科学の研究者、技術者も研究者、技術者である前に人間である、しかもごく当たり前の人物であることを銘記すべきであり、平凡な人間の素直な常識こそ大事にしたいと思う。そして、これは不変と思うのだが……。

三つ目に、松尾芭蕉ではないが“不易流行”的大事を言いたい。世の中の変化が激しくかつ急速であればあるほど、変えてはならぬものと変えねばならぬものの見極めの大切さである。——学の世界でも、産業活動においても——

この思いを次の言葉に托そう。

「神よ！ われらに与え給え、変えることのできないものを受け容れる冷静さと、変えるべきものについて、それを変える勇気と、この両者を識別することのできる知慧とを」

——ニーバ——アメリカの神学者